

異なる立場・領域に属する多くの関係主体の コラボレーションによる人材育成を目指す

京都大学 デザインイノベーション拠点



フロアプラン
(一部予定を含む)

◆◆◆整備の目的・方向性◆◆◆

- 諸学の叡智(えいち)を融合し、社会とともに歩む
- 俯瞰(ふかん)力と独創力を備え、専門領域を超えて協働できる突出した専門家を養成する
- 「出会い」や「対話」が生まれイノベーションを創出する空間構成

■計画設計のポイント

京都大学デザインイノベーション拠点は、京都市リサーチパーク (KRP) 9号館に設置された、京都大学デザイン学大学院連携プログラムのための実習・研究の拠点であり、産学官の人材が集い、交流する場である。

デザイン学

京都大学では、異なる分野の専門家と協働して「社会のシステムやアーキテクチャ」をデザインできる博士人材の育成を目指し、5年一貫の博士課程教育リーディングプログラム(リーディング大学院)「デザイン学大学院連携プログラム」を開始したところである。

本プログラムでは、「デザイン学」を共通言語として、Cyber(情報学など)とPhysical(工学など)の専門家が、経営学、心理学、芸術系の専門家と協働し問題解決が行えるよう教育を行い、社会を変革できる新しいタイプの専門家の育成を目指す。

独創力を高める

デザインイノベーション拠点では、主として、デザイン学カリキュラムにおける独創力を高める演習(問題発見型学習・問題解決型学習、オープンイノベーション実習、リーディングプロジェクト(博士研究))を実施するとともに、オープンイノベーション機能(学外から持ち込まれた社会の実問題を演習や研究に提供し、学内の研究成果を社会に還元する)を有するフューチャーセンターとしての役割を果たす。また、産官学連携・国際連携・大学間連携・学内連携を促すための様々なイベント・活動の実施を目的とした施設である。

「イノベーション」創出を誘発する空間

京都市リサーチパーク 9号館 5階のワンフロアの大大空間(約815㎡)に、異なる領域の人々の「出会い」や「対話」、「気づき」や「ひらめき」が生まれ、「イノベーション」の創出を誘発することができる空間をデザインしている。具体的には、メインエントランスを入ると、長い「メインコリドール(廊下)」が奥の広場空間としての「フレキシブルスペース」まで続いており、このコリドールに沿って、エントランス近くから順に「サポートスタッフスペース」「会議室」があり、更に「教員スペース」「セミナースペース」「フューチャーセンター」「実験設備ブース」が続いている。



受付、サポートスタッフスペース
(手前)と教員スペース(奥)



フレキシブルスペース



教員スペース(内部)：集中して作業ができる環境となっている

○教員スペースは、高さ1460mmあるいは1260mmのブースで囲まれているが、その適切な高さ設定により、ブース内に集中して作業ができる環境を確保しながら、開放感のある空間が形成されている。こうしたオープンな空間構成により、お互いの行動が垣見え、様々なインタラクションやコミュニケーションが期待できる。

○フレキシブルスペースは、15m×20m程度の大きさの広場空間であり、そこに持ち運び可能で、自由にセッティングできるテーブルや椅子を用意し、ディスカッションが自然発生的に生まれる出会いの場を創造している。特に、台形テーブルは多様な組合せを可能にし、カラフルな椅子は活気のある雰囲気を醸し出す。

○広場周囲に配置したプロジェクトブース」は、電線・LANケーブルなどを柱・梁(はり)に収納し、短焦点のプロジェクタを設置したスマートな空間となっており、そこではコラボレーションによる集中作業が行われる。

○フレキシブルスペースとプロジェクトブースは、コート&ケイブ(広場&洞窟)形式の空間構成といえる。さらに、広場空間の一面には、プロジェクトブースの仕切りにオレンジ色の紙を挟んだオレンジボードが設置されており、フリーディスカッションを促す場が設け(しつら)えられている。

■ 整備戦略

デザインイノベーション拠点

「デザインイノベーション拠点」は、産官学連携、国際連携、大学間連携、学内連携による教育の推進を目的として、京都大学の吉田、桂(かつら)、宇治キャンパスと連携先の京都市立芸術大学の中間にある京都リサーチパーク内に設立されたもので、「京都大学デザインスクール」(京都大学デザイン学大学院連携プログラムを実施する活動の通称)を可視化する役割を担っており、研究拠点形成費等補助金(リーディング大学院構築事業費)により整備している。

現在、京都大学デザインスクールでは、デザインイノベーシ



教員スペース(外から)：適切な高さ設定となっているブース。ブース越に奥の広場空間や京都の山並みが見える



プロジェクトブース：コンセント・LANケーブル等をブースの柱・梁(はり)に収納することでスマートな空間となっている



プロジェクトブース：短焦点のプロジェクタとすることで投影面近くの人も影にならない



プロジェクトブースのオレンジボード：ガラスパーティションにオレンジ色の紙を挟みオレンジボードとして使用している

■ 整備戦略 デザインイノベーション拠点

「デザインイノベーション拠点」は、産官学連携、国際連携、大学間連携、学内連携による教育の推進を目的として、京都大学の吉田、桂(かつら)、宇治キャンパスと連携先の京都市立芸術大学の中間にある京都リサーチパーク内に設立されたもので、「京都大学デザインスクール」(京都大学デザイン学大学院連携プログラムを実施する活動の通称)を可視化する役割を担っており、研究拠点形成費等補助金(リーディング大学院構築事業費)により整備している。

現在、京都大学デザインスクールでは、デザインイノベーシ



拠点が立地する京都リサーチパーク9号館

京都リサーチパークは、IT系など、約300社の企業が集積する日本初の民間運営による新産業創出、産学連携の拠点である。

ン拠点を、産官学が連携するための場として、「デザインイノベーションコンソーシアム」を設置する準備を進めており、2014年度から本格的な活動を開始する予定である。具体的には、デザインフォーラム、デザインセミナー、デザイン・ブートキャンプ、サマーデザインスクール、オープンイノベーションなどを実施する。

なお、デザインイノベーションコンソーシアムは、デザインイノベーション拠点を舞台とした様々な活動についての予算確保のための取組として、産官学の様々な組織が参画する会費制度を導入する予定である。

■ 利用の推進

広く開放する

学生がチームで取り組む問題発見型学習・問題解決型学習は、本プログラム学生だけでなく社会人や芸術系学生にも開放する。また、拠点のセミナースペースやフレキシブルスペースを活用したセミナーやワークショップの企画も積極的に企画しており、遠隔講義システムも援用しながら、多くの学生や教員が拠点を積極的に活用してくれるように工夫を重ねている。

また、拠点を広く国際社会に開放し、交流先大学の学生・教員の滞在する場とすることにより、国際的に切磋琢磨(せつさたくま)し刺激し合うことのできる環境としている。

シャトルバスの運行

デザインイノベーション拠点は、京都リサーチパーク内に設置しているが、最も多くの関係教員・学生が所属する吉田キャンパスと桂キャンパスを結ぶ学内のシャトルバスについて、2013年度から拠点付近での停車が部分的に認められ、2014年度からはすべてのバスの停車が認められる予定となっている。

また、拠点利用のためのセキュリティカードの発行、多くの学生・教員などの入退室管理の方法の整備、時間外使用のための規則の制定などにもきめ細かく対処しており、学生や教員が効果的に拠点を利用できるシステムの構築に努めている。

■ 施設整備の効果

博士課程教育リーディングプログラム

「京都大学デザイン学大学院連携プログラム」は、優秀な学生を俯瞰(ふかん)力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーへと導くため、国内外の第一級の教員・学生を結集し、産・学・官の参画を得つつ、専門分野の枠を超えて博士課程前期・後期一貫した世界に通用する質の保証された学位プログラムを構築・展開する大学院教育の抜本的改革を支援し、最高学府に相応(ふさわ)しい大学院の形成を推進する「博士課程教育リーディングプログラム」事業に選定されている。



■ 補足

整備年度：平成24年度～平成25年度

レンタル期間：平成25年1月～平成31年3月

建物の中心に都市広場を設けた 世界トップレベルの研究拠点

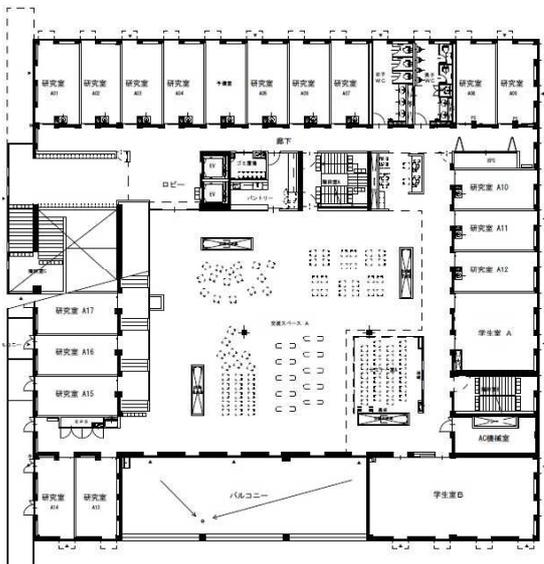
東京大学 カブリ数物連携宇宙研究機構研究棟



左：建物外観
(写真：北嶋俊治)
中・右：藤原交流広場

◆◆◆整備の目的・方向性◆◆◆

- 世界トップレベルの研究拠点を形成する
- 交流スペースで、研究者の対話や交流を促す



3階平面図

■計画設計のポイント 周辺建物との調和

東京大学カブリ数物連携宇宙研究機構 (Kavli IPMU) の研究棟は、柏 (かしわ) キャンパスの教育研究施設の一つとして、带状広場に列をなす建物である。周辺建物との調和を図りコルネードが設けられ、屋上には、柏の葉公園東側の並木道からも見えるパーゴラが設けられている。また、外観を特徴づける市松模様の開口形式により、構造体が負担する荷重を合理的に地面に伝えている。

いつでも学問的意見交換ができるスペース

建物内部には、「大学は対話を基礎とするアカデミアであるべき」との理想を基に、研究個室に囲まれた「都市広場」というべき交流スペースが設けられている。このスペースは、「そこに研究者が集い、いつでも学問的な意見の交換ができる場所」を実現するため、1階と2階に研究支援機能を納め、その上部階に設けられたもので、広場を中心として77室の研究個室が、らせん状に3周廻 (めぐ) らされている。交流スペースの中央には、ガリレオ・ガリレイの言葉でありKavli IPMUの研究の基本概念である「宇宙は、数学の言葉によって書かれている」と古いイタリア語で記された柱 (オペリスク) が立っている。

「都市広場」に向かって、様々な議論の場が立体的に配置され、学术交流の場として研究の熱気を凝縮する仕組みが形成さ

れており、例えば、全研究者が毎日15時に集まるティータイムに代表されるように、研究者一同が会し、専門分野を超えた活発な交流が日々展開されることで生まれた新たな発想から議論が展開し、そのすべての過程が、最終目的である「宇宙の謎に迫る！」の一点に凝縮されるのである。

らせんを登り切って屋上に出ると、「野外劇場」があり、季節の良い時期には研究集会の場として印象的な演出を可能にしてくれる。



野外劇場

■整備戦略

世界トップレベル国際研究拠点

Kavli IPMUは、2007年10月1日に文部科学省の世界トップレベル国際研究拠点として発足した。発足から10年間は、国から支援を受けることになっている。

東京大学は、カブリ財団からの寄附を受け入れIPMUのための基金とすること、そのため平成24年4月1日からIPMUを「Kavli IPMU」と国立大学法人初の冠研究所とすることを発表した。

■利用の推進

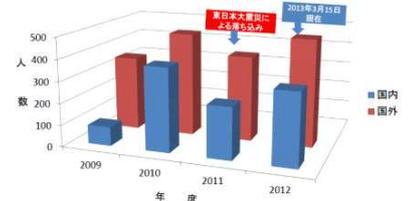
ネーミングプラン

Kavli IPMUは、本機構への寄附者を顕彰するために、研究棟内の各室に寄附者の名前を冠し、銘板に掲示する制度 (naming plan) を導入している。

■施設整備の効果

世界トップレベルの研究者が集結

世界からトップレベルの研究者多数をビジターとして迎え、活発な研究活動を促進しており、ビジター数は2011年度に震災の影響で減ったが、2012年度に回復、今後更に増加傾向にある。



■補足

整備年度：平成19年度～平成21年度 (基本設計を含む)
2011年 日本建築学会賞 (作品部門) 受賞
BCS賞 (2012年) 受賞